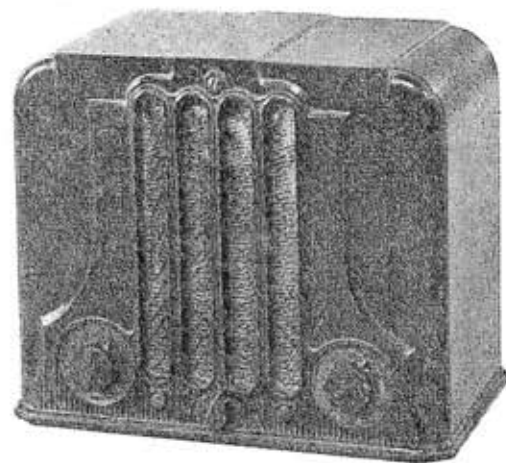


親子二代のマスコット

プラスチックラジオR-11型について



笹原朝治

このプラスチックラジオR-11型は、私の父が購入したものです。が、ずい分昔のことですから、購入年月や購入価格ははっきりしません。現在の物価から考えて、三円ぐらいだったのではないかと思えます。昭和十年に購入したとして二十五、六年の間働いてくれたことになりましたが、これだけ使用できれば安いものです。

終戦後二十一年ごろまで使用していましたが、私が復員してから新しいラジオを購入しました。そ

のときラジオ屋に「下取りしてくれ」というと「目方でなら」という。私も松下電器に勤めているのだし、父親も「長いあいだ使用して愛着があるものを、くずも同然に手離すのは惜しい」というので、物置き入りとなったのです。

それから一度掃除のとき見つけて「骨董品で音楽を聞くのも乙なものだな」と思い、取り出して聞いてみたが、はっきり聞こえない。「真空管がボケているのかも知れない」と思ってラジオ屋へ真空

管を買いに行ったが、この骨董品に合う真空管はどこにもなかった。そこでまた、ほこりくさい、暗い物置きに入れられるハメとなったのです。

その後も大掃除のたびに、くず、屋行きになりかけたのですが、父が手離しがたいらしく、今日まであった次第です。

思い出といっても父の方が多いでしょう。何といっても戦時中、警報や情報は全部このラジオで聞いたのですから。

電圧が低かったため、感度はあまりよくなかったが、そのわりに、故障らしい故障もなく、よく活躍してくれました。現在でもなおおすかに聞こえるのを「さすがにナショナルの製品だな」と思うのは、親バカに通ずる心理でしょうか。

今になってこんなものでも役立つのなら、くず屋に出さないでほんとはよかったと思うと同時に、父と私の二代にわたったこのラジオが、社史資料の一助に活用されるということをうれしく思いま

す。
(乾電池事業部・器具工場・生産技術係)

最後に、プラスチックラジオR-11型について、昭和三十二年十一月十五日号の社内時報に掲載さ

れた。目でみる製品の歴史から引用してみよう。

※

昭和十年十一月には、スピーカーをシャーシの高さにまで引き下げた、超小型のラジオが早くも出現した。わが社が、本邦最初の

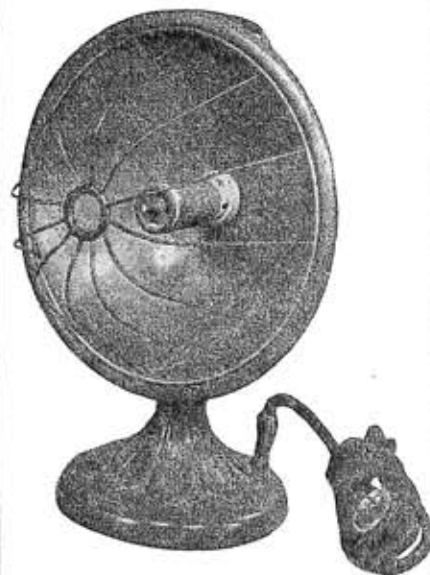
画期的製品として、プラスチックラジオR-11型を発表したのも、ちょうどこの頃である。

この時代から、マグネチックにまさるダイナミックセットの実現をみ、さらにスピーカー、シャーシを横にならべた横型のものに変

った。以来、戦後のスーパー化から現在まで、デザインの变化は時代の流行をふんだんにとり入れ、装飾品としてのラジオ格として千変万化し、同時にその性能も飛躍的發展を示し、今日に至っている。

老いたらぬぐえぬも

電気ストーブ反射型



坂田 滋 昭

長女の生まれた年のある日、祖父が大事そうに押入れから取り出して、「おしめかえの時はこれで暖めてかえてやりなさいよ」と妻に渡してやっていたのが、この電気ストーブです。私の生まれた時、風邪をひかないようにと祖父が買って来たというそれは、今でも古めかしいが、私の幼いころずっと使用していた、思い出の多いストーブです。「一度も修理に

出さないがとても丈夫だ」という、いつもの祖父のご自慢も、子供心に別にもとめずにおりましたが、今またこれで、自分の子供が、自分の育てられた時そのままに暖まっているのを見ると、何だか感慨無量の気がします。昭和の初期なら、きつと誰かの指先で、一つ一つが組み立てられたことでしょう。時移り人かわって、世はすべてオートメーシ

ン時代、家庭電化の波にのって、電器製品も目を追ってより新しいもの、より優れたものの生産に力が入れられておりますが、これらの品一つ一つが、誰かの家庭の一員となって役立つとき、何年かの後にもなお「ああ良い品だ」と言われるための努力こそ、大切なのではないかとつくづく思います。それでこそ、その品物の本当のねうちがわかるのではないでしょう

か。三十数年間というものの、わが家のために尽してくれたこのストーブ、昭和の波風烈しかった幾年月を、共に過ごしてきたこのストーブは、これからも祖父に暖かな養生を送らせてあげながら、いつまでも元気に務めてくれることでしょう。
(管球事業部・照明営業部・螢光灯課)